Shinran 850th 800th

京都教区

2022年７月1日発行

慶讃だより

2022年 夏号

〈慶讃テーマ〉

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

- 慶讃テーマから問われてくること
- 慶讃テーマ委員
- ８地区より
- 地区または組お待ち受け大会特集
- 各地区のお待ち受け始まる

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要（きょうさんほうよう）

第1期法要/2023年3月25日(土)～4月8日(土)　讃仰期間/2023年4月9日(日)～4月14日(金)　第2期法要/2023年4月15日(土)～4月29日(土)

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

慶讃テーマ委員
大橋 宏雄
おおはし・こうゆう
三重教区 淨願寺

「荷が重い」というのが当初の思いでした。どのようなテーマが良いのか皆目見当がつかず、最初の委員会では途方に暮れていたように思います。それでも回を重ねるごとに、他の委員の皆さんのお話と取り組む姿勢に刺激をうけながら、だんだんと方向が定まっていったように思います。テーマ委員会での話し合いを思い返してみると、「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」というテーマでずっと座談をしてきたような、不思議な感覚があります。実際には、時間が限られていることもあり右往左往しながら進んでいたのですが、着いてみれば一本道だったということかもしれません。何か新しい表現を生み出そうということよりも、私に至るまでの先達の歩みをたずねていく中で確かめられたこと、それが「南無阿弥陀仏人と生まれたことの意味をたずねていこう」ということだと、今はそう受け止めています。

一九七八年に同朋の会テキストとして発行された『宗祖親鸞聖人』というテキストがあります。九章からなるテキストの第一章が「人と生まれて」という章題です。その第一章の本文では親鸞聖人がどのような時代に生まれられたのかが語られます。そして「誰も彼も、悲しみや苦しみに耐えながら、その日一日を生きぬくことに精一杯であった。ただそれだけに、その時代社会のすがたそのものが、人々に人間として生きていることの意味を問いかけていたともいえよう。聖人は、そのような時代に、人として生をうけられたのである」とあります。では今はどのような時代なのか。今この日本で、また世界で起きている様々なことが、この私に人間として生きていることの意味を問いかけているのだと投げかけられています。

またこのテキストは各章に法語がおかれています。第一章の一つ目の法語には「ああ、人の世は夢幻であって、まことでない。いのちはかなくて、いつまでも留めることはできない。ひといきの間にこの世は過ぎ去ってしまうのである。ひとたびこの身を失えば、永遠にかえってくることはない。今ここにおいてさとらなければ、仏もまたなすすべもない。願わくば、人生の無常を深く心に留めて、悔いなきいのちを生きてほしい。（文意）」とあります。この文を受けて藤元正樹先生は「人間として生まれたということは、ただ生理的な事件ということではなく、人は死を知るとき、すなわち無常を知るとき、再び誕生の時を迎えるのでありましょう」とおっしゃいます。「無常なるがゆえに、人は仏を知ることができるのであります」とも。

どんな人も命がけで生きている。そうとは気づいていなくても、命がけで生きている。だからこそ悩みは尽きず、苦しみもまた尽きずにある。しかしそこそこが「南無阿弥陀仏」の響くところであるのだと思います。悩み苦しみが私を追い詰めるものから、私を歩ませるものになる。その歩みは南無阿弥陀仏によって、人と生まれたことの意味をたずねるという方向が与えられる。そしてまた南無阿弥陀仏にたずねていく。右往左往しながら、振り返ってみれば一本道だと知る道を歩んでいく。慶讃テーマに今、そう聞かせていただいています。

Shinran S50th S00th

お待ち受けされているのは私の方

若狭

山名 彰心 やまな・しょうしん
若狭第二組 浄蓮寺

昨年暮れ、近くのご門徒のおじいさんから、「父親の五十回忌が近く巡ってくるはずじゃが」と聞かれ、「あと二年先やけど、もし何なら繰り上げてされてもええで」と応えると、「いいや、楽しみに待たせてもらいます」と安堵して帰られたことがありました。

そういえば父である先住職も、宗祖の七百五十回御遠忌法要を「何年後に、うちの寺でお勤めするんや」とことあるごとに、私に問うていたことを思い出します。実際、自坊で御遠忌法要が勤まったのは二〇一九年秋。父がお浄土に還って二年半後のことでした。どれだけ、三度目の御遠忌に遇いたかったか。

顧みれば先住職は一九五九年、先々代の死去に伴い住職を継承。この間、宗祖の七百回御遠忌法要、十数年後には御誕生八百年慶讃法要、一九九八年には蓮如上人の五百回御遠忌法要に住職として出遇ってきました。それでもなお、宗祖の七百五十回御遠忌法要を待ち焦がれていたのです。

御遠忌をただ待つのではなく、その度毎に「関東二十四輩」や「越後の七不思議」をはじめ、宗祖や蓮如上人のご旧跡をご門徒の方々と一緒に訪ね歩いてきました。春の蓮如上人御影の御下向道中のお迎えも、毎年の恒例行事でした。きっと、その場に身を置くことで宗祖や上人と出遇い、「御同朋御同行」を実感できたのではないかと思います。

「待ち受ける」を辞書で引くと、【来ることを予期して待つ。心構えをして待つ】と書かれていました。私には時節柄か、何か敵を迎え撃つようなニュアンスに感じてしまいますが、きっとご門徒さんが親の年忌法要を心待ちにしているように、法要の準備をしながら大切な方と改めて遇うことができる慶びの表現が、「お待ち受け」なのでしょう。

私の在所では、親戚の法事に招かれることを「よばれ」にいくと言います。もちろん、法要後のお斎をいただく【およばれ】を念頭にした言葉でしょうが、「亡き人から呼（喚）び寄せられる」意もあると聞いたことがあります。

そういう意味では、お待ち受けしてくださっているのは宗祖の方なのかもしれません。いつでも、自分の都合を言い訳にして逃げてばかりいる私を、「目覚めよ」と宗祖が呼（喚）び続けてくださっていたのです。

宗祖御誕生八百五十年・立教開宗八百年の慶讃法要まであと一年を切りました。三月二十七日には、東舘紹見・大谷大学教授を招いて若狭地区聖典学習会があり、四月一日は組教化委員会で来年の下見を兼ね、「春の法要」に団体参拝してきました。そして、四月十日には、一楽真・大谷大学学長を講師に「若狭地区お待ち受け大会」が開催されました。

一楽先生は講話の最後に、「招喚の勅命」という言葉を紹介されました。「ナマンダブ」と私が称えていたと思っていたお念仏が、実はアミダさんからの喚び声であったという。何やら、先住職が仕掛けた〝アミダの網〟に引っ掛かったと感じた一日でした。

地区または組お待ち受け大会特集

慶讃法要

若狭地区

琵琶湖の北端、海津大崎の桜並木が見頃を迎えた四月一〇日、県境を挟んだ福井県三方上中郡若狭町のJA福井県上中支店大ホールにて、若狭地区「お待ち受け大会」が開催されました。講師は、大谷大学学長の一楽真先生、「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」の講題にて、午前と午後、二回のご講話がありました。

若狭地区では、以前から一楽先生を招いて、地区同朋大会として、午前と午後、昼食をはさんで、丸一日にわたり聞法の場がひらかれてきたそうです。

今大会は、慶讃法要お待ち受けの大会とするとともに、お昼の食事を取りやめ会場換気の時間にあてるなど、新型コロナウイルス感染症対策を徹底したうえ、午前と午後の参加者を入れ替えるかたちでの開催となった旨、三原地区教化委員長よりうかがいました。

一楽先生のお話では、来年三月の慶讃法要をむかえるにあたり、「慶讃」の意味を教えていただきました。「慶讃」とは「よろこぶ」・「ほめたたえる」という意味を表します。「供養」の根っこには「讃嘆」、つまり「ほめたたえる」気持ちがある。そのことを形にして、供えるという行為がおこるのだと教えていただきました。また、慶讃テーマに「南無弥陀仏」が入っていることにふれられ、お念仏は誰の上にも成り立つ仏道であるが、親鸞聖人の時代、仏教界の権威である奈良仏教では、お念仏の教えが受け入れられなかった。自らが握りしめる正しさにとらわれる現代においてもまた、受け入れられていないのではないかと指摘をされました。そして、「たずねていこう」という言葉について、わかっていることはたずねない。わかったこととして終わらせてはいけないと指摘されました。

一楽 真 氏による講話の様子

あらためて考えてみると、現代社会において、一年中何かに夢中になり、自分に満足感をもって生きている人がはたしてどれだけいるのか。また、自分の生き方がそうなっていないと冷静に認識して、主体的に状況をかえるということがはたしてできるだろうか、と思います。

私たちは、はやく楽になりたいので手っ取り早く「答え」を求めて、一度つかむとそれを放そうとしないようです。一楽先生は「誰とも代わることのできない一度きりの人生を、どうすれば後悔なく満足して生ききれるか。簡単に答えがでないことを、問わずにはいられません」とおっしゃいました。

今回、先生のお話から、親鸞聖人は南無阿弥陀仏を、お釈迦様の教えに聞いていかれたと教えていただきました。「南無阿弥陀仏」は「阿弥陀仏に南無せよ」という召喚の勅命であり、この呼びかけを聞くことから始まる生き方があると、親鸞聖人が教えてくださっている。苦労しても構わない。一人ひとりが人生を尽くしていくことが願われている。そのことを、若狭地区の皆さんと聞きあいました。

教化広報部会　山本　滋
比叡谷　真

25西

近江第二十五西組

五月十四日（土）、滋賀県高島市で近江第二十五西組の「慶讃お待ち受け大会」が開催された。

会場へ入り、安井組長へご挨拶する。一番忙しい最中に声をかけてしまったが、「忙しいので、ゆっくりとはご案内出来ないが、どうぞお参りしていってください」と柔和に対応してくださった。しかし、顔にはこのお待ち受け大会への並々ならぬ気概があらわれている。

聞けば、例年この時期に開催されていた同朋大会が、ここ二年はコロナ禍のため中止となったが、今年は何とか開催したいとの思いから、慶讃法要に向けてのお待ち受け大会を開催することにしたとのこと。そしてコロナ下での開催に当たっては、会所となる傳正寺の本堂の外陣部分、本堂の縁を含めた面積を測り、換気の徹底、体温測定、手指の消毒、マスク着用等の感染対策を取れば、七十五名の収容は可能と判断したと話されたが、例年の同朋大会が二〇〇名超の規模ということもあり、久しぶりの聴聞の場を制限することには断腸の思いがあったようだ。

傳正寺の本堂は組内より参集した参加者で席は埋まり、真宗宗歌を三番まで斉唱し「お待ち受け大会」が始まった。開会行事では、コロナ対策の徹底が周知された。安井組長は挨拶の中で、この大会を開催するに当たって、人数制限を大胆に行うほか無かったこと。それで何とか開催にこぎ着けたこと。そして皆で集まって開かれる久しぶりの聴聞の場であるので大いに聞法していってほしいと語られた。

正信偈同朋奉讃のお勤めの後、同朋大学特別任用教授・大谷大学名誉教授織田顕祐氏による法話になった。タイトルは「貪愛瞋憎の雲霧」。赤本一〇頁の課題が丁寧に語られた。

織田顕祐 氏による法話の様子

「無明」ということがまず課題となる。無明は明かりが無いということであり、闇の中で光の存在を知らなければ、暗いとすら思えないのが無明ということ。阿弥陀の存在によって、人間の本質的な暗さは破られ、暗さを知ることはできたが、私たちは毎日、貪りや怒り憎しみのこころから離れられず、雲や霧のようにずっと覆われたまま。しかしその雲や霧によってかえって太陽の存在を知ることができるのだと。貪愛瞋憎の雲霧（煩悩）ということは仏が照らしていることを証明しているということ。私たちが生きているということが仏の光が当たっていることを証明している場所になっている、と語られた。

法話の後に但馬前宗務総長の慶讃法要にかける想いの動画と慶讃テーマソングの動画を視聴し、続いて感話の後、岡本推進員会長が「よびかけ文」を朗読し、全員が続いて唱和した。

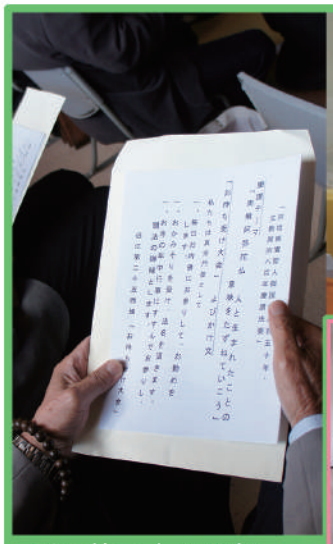
我々は、親鸞聖人の教えを聞くものであると真宗門徒としての心得を高らかに宣言して閉会した。

私たちは真宗門徒として
一、毎日お内佛にお参りして、お勤めをします。
一、おかみそりを受け、法名を頂きます。
一、お寺の年中行事にすすんでお参りし、聞法の御縁とします。

近江第二十五西組「お待ち受け大会」

滋賀県高島市マキノ、ここに親鸞の教えが確かに根付いていると感じた近江第二十五西組の「慶讃お待ち受け大会」であった。

教化広報部会　蒲池　義圭



近江第二十五西組
お待ち受け大会の様子

若狭地区
お待ち受け大会の様子

各地区のお待ち受け始まる

来年のご本山での宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要をお迎えするにあたり、京都教区では地区または組でお待ち受け大会を開催します。現在の進捗状況のおしらせです。

丹但地区　各組で独自に開催

丹波第１組	２０２２年１０月１６日(日)
丹波第２組	慶讃法要後に検討。
丹波第３組	検討中
但馬組	検討中

石見地区　各組で独自に開催

石東組	２０２２年１０月１日(土)　正樂寺(浜田市)　講師：本山慶讃テーマ委員
石西組	検討中

2022年秋号　**予告**

地区または組
お待ち受け大会特集

近江第26組 ← 若狭地区 近江第25西組

今後随時、上記以外の地区の開催情報や実施されたお待ち受け大会の様子を誌面にておしらせしてまいります。

真宗大谷派 京都教区『慶讃だより』2022年夏号
第6号 全8号
発行人　日野 隆文（真宗大谷派京都教務所長）
発行日　２０２２（令和４）年７月１日
発行所　真宗大谷派京都教務所　Tel：075(351)5260
〒600-8164　京都市下京区花屋町通烏丸西入
Eメール　kyoto@higashihonganji.or.jp
表紙絵　「阿弥陀（あみだ）～光あふれる世界へ～」
伊藤はるか

真宗大谷派京都教区ホームページ
京都教務所　検索

編集後記

「プーチンの戦争」と呼ばれるウクライナへの侵攻の終わりが見えません。▼「私は正しい　争いの根は　ここにある」、同朋会館の廊下に掲示されていた言葉です。私たちは皆、自らの正しさ、価値観を握りしめ生きていますが、その握りしめているものが本当に間違いのないものなのか確かめること（仕組み）がなければ、それは独善にしかならないでしょう。自らを教えに聞いていくことの大切さを改めて思います。▼今号で慶讃テーマ委員の大橋宏雄氏が言うように、時代社会が「私」を問うてきます。コロナや戦争のある中、私たちは慶讃法要をお迎えします。時代社会から問われる私を、教えにたずね、明らかにする御縁としたいです。

（教化広報部会　幹事　藤浪　遊）